宗教的統合における第３の信仰

—部族宗教から国家宗教への発展に関する問題—

The 3rd worship in Religious Synthesis Integration

—About the Development of National Religion from Natural Religion—

中　野　　幡　能

序

ヨーロッパにおけるキリスト教の根強い教化，或いはまた，イスラム文化圏における宗教的規制力はよく知られているが，これらの諸国も原始時代からはそうではなく，これらの国々にもかつては古い民族宗教を有していた。これらの民族宗教が創唱宗教へどのようにして転換していったか。日本人には常に関心のある問題であった。

幸にして昭和48年３月25日より５月８日迄アフリカ，ヨーロッパ，とくにエチオピア，エジプト，ギリシャ，トルコ，スペイン，イタリア，フランス，スイス，オーストリア，西ドイツ，フランス，イギリスの12カ国の主として宗教的遺跡及び宗教美術を直接観察することができたので，先学の見解からでなく，私なりの立場で，日本の宗教史とくに神社と対比しながらとりあげて報告にかえたいと思う。尚この海外研究の報告の１部は拙著『古代国東文化の謎』—宇佐神道と国東仏教—（新人物往来社，昭和49年２月刊），「ラリベラの寺（新人物往来社，『歴史読本』昭和48年８月号），「カルナックの神殿」（昭和48年10月『芸大祭』），「ヨーロッパの美術館」（大分合同新聞，昭和48年７月27日夕刊）等に報告したので，御参照頂きたい。

神道宗教の成立過程

日本における固有宗教は神道宗教であるが，神道はナチリズム(Naturism)，やアニミズム(Animism)より発達した宗教であることは云うまでもない。そしてその成立過程はヨーローパではギリシャの宗教に最もよく類似している。従って山，川，温泉，風，巨石などあらゆるものに精霊を意識しそれが，部族の信仰の対象になり，やがて民族宗教へ発展し，国家的神道の中に組み込まれている。

例えば筑波山の神にしても『万葉集』巻３には

朋神（ふたかみ）之貴山（たふときやま）

とあり，「貴山」とあるように漸く多くの人々の崇敬を得てはいるが，アニミズム段階を漸く脱した形跡がみえる。また同書巻九によると

男神も許し賜ひ，女神もちはひ給ひて

と，「たふとき山」である「朋神」は「男神」と「女神」として，しかも「許し賜ひ」として人間的意志を認めているので，人格神に移行しつつある形がみられる。これが『続日本紀』承和九年（842）10月２日の条によると

常陸国無位筑波女大神，並従五位下

とみえる。承和に入る段階に「女大神」とみえ，また貞観（859－876）には「筑波男神」とみえるので，８世紀より９世紀に入る段階にははっきりと，人格神として人間と同様に而も常人よりは偉大なる神として「大神」といわれ，「従五位下」という高い位を与えられている。こうなると可成り広い地域の神として崇敬の対象になってきたのが，朝廷にまでとりあげられるようになっているので，常陸国神の地位にまで上っている様がうかがわれる。しかし寛政11年（1799）に編まれた『常陸国二十八社考』になると

筑波山神社２座（中略）所祭之神二座，伊**弉**諾尊在陽峯，伊**弉冉**尊在陰峰，謂之筑波山大明神，（『神祇全書』４，Ｐ．599）

とある。遺憾ながら中世の状況がわからないが，18世紀になると二神はイザナギ，イザナミの二神となってしまっている。いうまでもなく「諾**冉**二神」は『古事記』『日本書紀』にみえる神であるが，このように記・紀の神に

統合されてしまったわけであるが，いつごろこのようになったかは明らかではないが，18世紀以前であることはいうまでもないが，少なくとも中世末にはかかる状勢が生まれたのではなかろうか。

筑前国竈門山の神は『続日本後紀』承和7年（840）4月21日の条には

筑前国従五位下竈門神，筑後国従五位下高良玉垂神並従五位上

とある。既に承和6年以前に従五位下を授けられている。竈門山の精霊として崇敬をうけていた崇敬の対象は人格神として扱われ，筑前国の衆庶に親しみをもたれていたことがわかる。この日肥後阿蘇山の健磐龍神は従四位下勲五等から従四位上，筑後高良山の神は，玉垂神とよばれ従五位上を授けられている。阿蘇山や高良山ではただ漠然と山の精霊とうけとられているのでなく，岩の状態とか，高良山の場合は神籠石が築造されている如く，もっと進んだ状況がみられる。これは別として竈門山の場合は，竈門山の精霊が人格神として扱われているのであるが，正和2年（1311）8月の編さんになる『八幡宇佐宮御託宣集』によると

竈門明神波吾姨

となっている。つまり，竈門神といわれた，山の神としての人格神は更に「明神」[1]として，外来宗教の影響がみえるのみならず，「吾姨」として，「八幡大菩薩」の「姨神」だとなっている。つまり人格神は更に「人神」の信仰に発展し，家族的関係がみられる。

古代エジプトではオシリス(Osiris)イシス(Isis)ホルス(Horus)は1組となって，父，母，子というような家族関係がみられるが，竈門神と「八幡大菩薩」との地域を異にする所に成立した神々の間に家族関係が成立している。このようにみられるようになると，更に明確になって行くのである。正徳2年（712）の『和漢三才図会』によると

竈門山上祭神一座玉依姫，相殿 左神功皇后 右応神天皇

となっている。このように「姨神」は玉依姫，更に又，神功皇后，応神天皇となって，家族関係は一層はっきりしてきて，全部が「人神」となっている。それだけでなく，皇室の重要な人物と結びついてしまっている。

駿河国駿東郡の風穴神社は「サムロ様」といっていたのであるが，元禄のころには，「シナツヒコノカミ」ということになっているが，いうまでもなく『日本書紀』の風の神になってしまっている。

飛鳥期の宗教統合

このように例をあげると際限がないが，これらナチュリズム段階の神々は中世または近世になると，人々はすべて『古事記』『日本書紀』にみえる神々に統合されてしまっている。これらの例はその統合が中世または近世に行われているのであるが，中には『記・紀』編さん前後に，皇室に関係する神々に統合されている場合もある。

常陸，下総に鎮座する香取，鹿島神宮についてみると，鹿島にはタケミカヅチ命，香取にはフツヌシノ命を祀っている。両神は天孫降臨の時，大きな功献のあった神である。タケミカヅチはフツヌシと共に天孫の命により，使者として出雲国に降り，大国主命と強硬な談判を行い，遂に大国主は天孫に国を譲ったが，大国主の御子建御名方命は反対した。タケミカヅチは信濃までこれを追い，これを殺した諏訪神社はこの建御名方を祀ってあると伝えている。

また『三代実録』貞観8年(866) 正月20日の条によると鹿島神宮司は香取，鹿島御子神は陸奥国に次の38社があると述べている。[2]

菊多郡1，磐城郡11，標葉郡2，行方郡1，宇多郡7，伊具郡1，亘理郡2，宮城郡3，黒川郡1，色麻郡3，志太郡1，小田郡4，牡鹿郡1，

更にこれを『延喜式』によってみると

黒川郡1，亘理郡3，信夫郡1，磐城郡1，牡鹿郡2，行方郡1，栗原郡1

の10社がみえ，その内訳は鹿島8，香取2社となっている。而も陸奥国だけでなく，磐城，陸前にまで及んでいるのである。[3]

これに対して魚澄惣五郎博士もタケミカヅチは出雲に使者に行ったものがどうして当時蝦夷の巣窟である常陸に鎮座したかということ，と如何に香取鹿島の神威が高いからといってもその御子神が東北地方に広く分布していることについては，ただ歴代の天皇が東北経営をしたために両神が広く祀られるようになったとみるべきではなく，それ以前から祭られていたとみる方が妥当であるとみなければならぬと云い，更につづけて，この二神は天孫系とは全く別箇の系統の神で蝦夷地方に古くから繁衍した氏族の祖神であろうといっている。

魚澄博士[4]は，更に疑問になる問題は鹿島香取の神に奉仕する神官が中臣氏であるという事である。いうまでもなく中臣氏は，天児屋根命の子孫で鹿島香取には何の関係のない氏族であり，中臣氏の祖神はアメノコヤネノ命は河内国枚岡社に祀られていて，厚い崇敬をうけていると述べている。

『常陸風土記』によると崇神天皇のとき中臣氏の祖大中臣神聞勝命に神託があった。[5]神聞勝命はこれを天皇に

告げる。天皇は驚き，神宮に幣として大刀，鉾，鉄弓，鉄箭，馬，鞍，鏡，等一連を「香島宮」に奉ったというのである。ついで景行天皇の時には鹿島大神が中臣ノ圧狭山命に神託があり，舟を造って津の宮に納めたともある。このように中臣と鹿島神との関係は古くからあったようである。

平城京ができると藤原氏は氏神として春日山麓に春日神社を祭ったが鹿島社のみであった。神護景雲2年(766)11月現社地に移るとき鹿島神を主体に祀り，ついで香取枚岡の2座を併祀している。[6]また『続日本紀』宝亀8年(777) 7月の条によると内大臣藤原良継の病により，鹿島社に正三位，香取神に玉四位上の位階を授け，このときには「其氏神鹿島社」となっている。

また久米邦武博士はフツヌシ命は大和石上神宮にまつられている剣のカミであり，タケミカヅチ命にフツの剣を授けて遣わされたのではあるまいかといっている。[7]然るときには中臣氏はどのようにして鹿島社の司祭者になったのであろうか。大中臣神聞勝命の託宣により天皇が太刀以下を奉ったというように「香島国」の神社の祭神を天孫神話のタケミカヅチ命に送りこんだのが神聞勝命であり，その子孫が祭るようになったのではあるまいか。つまり，鹿島香取の神を天孫神話の神に統合したのではあるまいか。

しかし横田健一氏も指摘しているように，鹿島，香取の祭神武甕槌神，経津主神の初見は『古語拾遺』であり，ついで『続日本紀』承和3年(836) 5月丁未の条で，既にみた如く『常陸風土記』や記・紀には神名は何にも記されてなく，『風土記』には『鹿島大神」とだけ記されている。のみならずその社名ですら『続日本紀』天平宝字2年(758) 9月丁丑の条にみえる「常陸国鹿嶋神奴218人を便ち神戸となす」とあるのが初見である。[8]

また中臣氏については大化5年(649) 香島郡を神郡として要請したのは大乙上中臣鎌子，大乙下中臣兎子であった。また天平勝宝年中僧満願が大宮司従五位下中臣連鹿嶋連大宗と大領中臣連千徳等とともに建立している(天徳3年(859) 2月16日の太政官符)。

このうにみると「鹿島神」といわれていた神が，記，紀にみえる神に統合されたことは事実であり，その時期七世紀の中頃であろうか。というのは記・紀の神＝国家神道の神になることによって神郡が認められたからであろうし，その推進者は中臣氏であることからすると，その司祭者になったものであろう。そうすると，貞観8年(866) の38社の鹿島香取の御子神も奈良平安にかけて蝦夷征討の進むにつれて，各地に祭られたということにみることが妥当であろう。

このようにみると鹿島・香取神が記紀神話の神に統合されるためにタケミカヅチ・フツヌシが祭神となったのであってその時期は7世紀の半頃であり，それを推進したのは中臣氏でありそのために中臣氏が宮司として司祭するようになったのであろうということになる。

日本神祇の中で特に大きくとりあげられるのは出雲神話である。出雲大社についての問題について鳥越憲三郎氏によると出雲族の発生の地は杵築大社のある出雲郡ではなく，意宇郡であり，その神話についても出雲人の編んだ『出雲風土記』の神話に対して，記紀の編さん者は全くこれを無視して，記紀では出雲郡の肥河（斐伊川）を中心に物語りができている。そのため出雲国造である果安臣は和銅元年(708) に国造になり，養老5年(721) まで14年間その位にあったが，在職中に出雲郡杵築大社のある土地に転居した。

転居の理由は出雲を代表する祖神は須佐之男命が皇室の祖先である天照大神の弟となっていて，須佐之男命が大蛇から得た草薙剣は皇室の三種神器の一つとなり，大国主命の国譲りにより，天孫降臨が行われ，大国主神は，水穂国の国作りの神となったという神話を出雲族は喜び，且は出雲族の保身策として，大国主神を祭る大社を建て，意宇郡を捨てて，出雲郡に移った。[9]しかもその始祖は天照大神の御子といわれる天穂日命の後裔ということになっているのである。従って杵築大社の成立は8世紀初頭であり，ここに出雲族は完全に記紀神話＝国家神道に統合されたわけである。かくて出雲神の場合はその成立の神話を含めて完全に皇室中心の神話に統合された。

関東の鹿島香取社に対して最もよく似た事例として横田健一氏は九州の宇佐八幡宮をとりあげている。私の研究では宇佐八幡宮は古くは八幡宮又は八幡大神宮と称しているが，国史に登場するのは天平にみえるのが初見である。縁起では欽明32年（571）（数説あるが）応神天皇が宇佐に現われ，大神比義が祀ったといわれている。しかし諸記録，伝承等を総合してみると，宇佐氏族の神と幸嶋氏族の神とが合体したのがヤハタ神社であった。大神比義が祀ったというのは，蘇我馬子が大和から差し遣わしたもので，始めて神社が創立されたのではなくて，祭神を応神天皇にしたのだろうという結論になった。

それも簡単に行われたのではなく，伝承等によると可成りの強圧の中で行われたようである。しかしそれによって八幡宮は朝廷に非常に高くあつかわれるようになった。このように強制したのはこの地方が土着の民と新羅渡来人が融合した中にできた神であったからである。た

またま百済が亡び，任那が亡ぼされ，日本は強力な新羅に対処しなければならないので，このヤハタ神の国をはっきりと大和朝廷のかみと統合させる必要があり，遂に応神天皇という人神を導入したのであった。これによって八幡宮の宗教的勢威は奈良時代にその花を開いた。つまり八幡宮は６・７世紀の頃，記・紀神話というより，皇室神道そのものに統合したのであった。

しかしそれによって全く八幡宮は皇室神道に統合してしまったのであろうか。白鳳にできた法鏡寺，虚空蔵寺という寺はいわば応神八幡宮と原始八幡宮の神宮寺であったが，天平10年(738) この２寺は統合し，神宮寺弥勒寺ができたが，原始八幡宮の神職団は道鏡と意を通じ，比咩神宮寺をつくった。天応元年(781)応神八幡神は「八幡大菩薩」となった。すると原始八幡宮の祭祀集団は比咩大神を「人聞菩薩」として登場し，その活動場所は六郷山(豊後国国東郡)という山をより所にした。そこには新羅仏教のみならず花郎道をとり入れ，ハルマン信仰・天童信仰をとり入れ我国に類例のない信仰を創りあげた。この「人聞」については長く学界では問題にしていたが，中山太郎，柳田国男は「人聞」は「人母」更に「神母」であるとし，１種の巫女とし，比咩神は八幡と称する王子の御母即ち天神の御妻すなわち母子神信仰をうち立ててまいり，今日も尚その信仰は生きている。

以上日本における神社宗教が，原始的な，ナチュリズム，アニミズムの段階から歴史時代の宗教に発達するとき，とくに国家神道と統合される段階をみると徐々に歴史時代に統合された神社と七世紀を中心とする頃統合された神社とがあり，とくに七世紀を中心とした時代に統合された神社は地方の有力な神社であり，その統合の場合には司祭者が交迭するとか祭神が変更するとか社地が変更するということで行われているが，八幡宮の如き場合は，原始信仰が変形しながら残っているのである。

キリスト教 と民族宗教

先に述べたのは日本における神社宗教の発達の場合をみたが，日本とは可成りの事情を異にしているヨーロッパはキリスト教信仰圏であり，ヨーロッパの近代社会の発達にこのキリスト教倫理があらゆる場合に貢献してきたことは周知の事である。

しかしギリシャ（の諸島），ローマ，一寸離れるが，エジプト等を歩いてみると，キリスト教以前のそれぞれの民族宗教の名残りを示すすばらしい遺跡を遺し，殆んど「～神殿」と称している。しかしこれらの「～神殿」という遺跡は日本流にいえば殆んど「～神社趾」というのと全く変りはない。そして日本の神社宗教を明らかにするためにはこれらの宗教が数々の資料を有していることを窺うことができた。

例えばエジプトのテーベは新王朝の都であったが，そのルクソールから対岸には王家の谷といわれる岩山があり，そこには62の陵墓がある。陵墓は死体を葬るだけで，それを祭る所は葬祭殿が，２・３キロ離れた山の裏側にある。外にルクソールには「神殿」がある。葬祭殿として分離したのはトトメス王の時であるという。而も葬祭殿の様子は嘗ての台北神社の参道を思わせるような構造であるが，〈葬る墓〉と〈祭る墓〉と別々にある点では中国の墓と廟，日本の両墓制，応神陵と八幡宮を思わせるものがある。

このようにエジプトやギリシャ，ローマの古代宗教(民族宗教）は日本の神社宗教の研究のためには極めて貴重な材料をもっている。この問題は別途考えるとして，これ程根強い民族宗教がどのような形でキリスト教に統合されて行ったのか，これは日本人には大きい関心のある問題である。

さてギリシャ，ローマを始めとするヨーロッパ各国キリスト教寺院，博物館をみると，特に目立つのは聖母マリアの像，又は聖母と子の像が至る所にみられるということ。とくにギリシャ，イタリヤ以北の博物館等にある歴史時代のマリア像にはすばらしい像が無数にみられることである。

もう一つの問題で特に注意を引かれたのはギリシャでみられた「プロシキュータリ(PROSIKIUITARI)」，フランスでは「ロロドー」というのがあった。

マリア崇敬 (Mariolatory, Mariolatorie) というのはイエスの母マリアを童貞無垢の聖母として尊崇することである。このことは新約聖書「ルカによる福音書」，「ヨハネの第２の手紙」，「使徒行伝」などにもみられるのだが，どうしてこのことが強調されてきたのかについては，一般にいわれていることとしては，キリスト教がローマに入って行くにつれて，在来の民族宗教にみられる女神信仰や聖者信仰を無視できず，これらの信仰がイエスの母マリアの崇拝と結びついて強くなったといわれている。

つまり一神教であるキリスト教が，各固有の民族宗教を有するヨーロッパ諸国へ入って行くとき，その国の民族宗教を無視することができず，女神信仰と聖母崇敬が融合して，漸くキリスト教への転宗が行われてきたというのである。

しかしキリスト教と民族宗教の融合はそれだけではな

い。エチオピアのゴンダールの教会は珍しく円形の教会堂で，教会堂の中は，内陣と外陣のつくりになっていて，内陣にはエチオピア風の絵筆で一様に壁画が画かれている。その内陣には入れないが，内陣をとりまいて外陣があるが，信徒たちは外陣にすわりこんで断食をしていた。キリスト教に断ち行があるのをきいたことがないが，恐らくエチオピア固有宗教の名残りであろうと思われた。

ギリシャの町を歩くと町外れには必ず，小さい地蔵堂のような堂がある。中には板に画いたイコンを安置している。もっと簡単なものは木の柱の上に「鳥籠」のような小さい木箱に表はガラスでしめてあるものがある。中にはイコンを祀っているが，ギリシャでは「イコナ」といっている。この小堂や簡易な聖器を「プロシキュータリ」といっている。月の30日と聖人とを結びつけて，当日の守護神としての信仰ができあがっている。

町外れの小堂は町の守護にあずかるものであるが，日本の庚申塔，サヤの神，道祖神，韓国の城隍堂，中国の石敢当など全く同じ機能を果している。

ギリシャのロドス島は小さい島であるが，清潔な感じの村落が形成されている。各国の人々は必ずこの島に立ち寄るが，島にあるのは 150個許りの教会堂があるだけである。きれいなすみきった空，そして海，立木の少いこの島の小山から麓にいたるまで，真白な小さい教会堂が立っている。１つの堂はやっと４・５人の人が入れる程度の規模のものが多い。しかし必ず灯明がともっているのは，人々が礼拝している証拠である。

私には厳島神社や宗像辺津宮，出雲大社の八百万神を祀る小祀や飛鳥坐神社境内の小祀が思われてならない。コリントス神殿の麓の海辺にはその土地に生まれた聖人の生誕地としての小堂が建っていた。勿論こんな堂には人は住んではいない。このようなものをみると古代ギリシャ宗教は，決して消えていない。それは肥前の「カクレキリシタン」の「納戸神」を逆にしたようなものではないかと思われた。

結

このようにみると日本の国家神道の成立にせよキリスト教の国教化の問題にせよ，根強い部族宗教なり民族宗教，或は民族宗教を創唱宗教に統合するときには，第三の信仰を認めなければその統合ができないということがわかる。

ヨーロッパのキリスト教でも何度かマリア信仰を禁じたが成功せず，ついに11～13紀にはこれを一般化し，ヨーロッパのカソリックでは現在もマリア信仰は強い。ギリシャにおける多神崇拝の要素はプロシキュータリー，フランス等にはロロドーとして残っている。それは日本の八幡信仰の中の〈にんもん〉の信仰つまり「母子神」信仰と同様に，今日も尚残っているのである。

〔註〕

(1) 原田敏明「明神と氏神」（社会と伝承，13～３・４号）
(2) 魚澄惣五郎『古社寺研究』339～40頁
(3) 宮地直一『神祇史の研究』
(4) 『古社寺の研究』342頁
(5) 小島瓔礼別伝が校『風土記』崇神紀・記にある頁133
(6) 宮地直一「春日神社の成立」(『神祇史の研究』)
(7) 『大日本時代史』
(8) 『日本古代の精神』176頁
(9) 『出雲神話の成立』